

図 8.2

B. 割付け (帯筋の最大間隔は特記による)

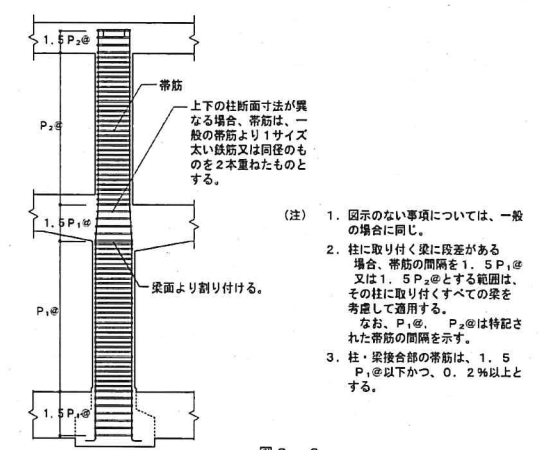


図 8.3

9. 大梁

A. 大梁主筋の継手及び定着の一般事項
 (1) 梁主筋は、原則として柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、(2)により柱内に定着することができる。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図9.1による。

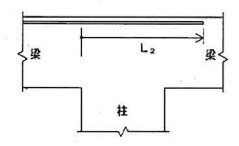


図 9.1

(2) 梁主筋を柱内に折り曲げて定着する場合は、次による。
 なお、定着の方法は、6.(c)による。
 上端筋：曲げ降ろす。
 下端筋：原則として曲げ上げる。
 (3) 段違い梁は、図9.2による。

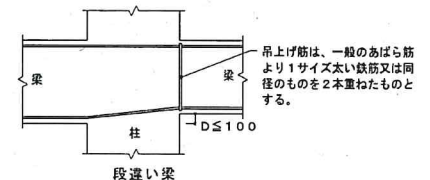


図 9.2

B. ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長

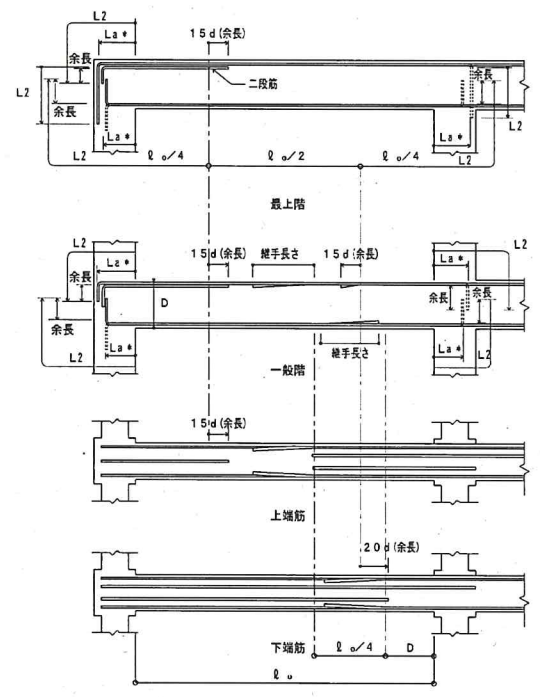


図 9.3

(注) 1. 継手中心位置は次による。
 上端筋：中央 $\leq \frac{\ell}{2}$ 以内
 下端筋：柱面より梁せい (D) 以上離し、 $\frac{\ell}{4}$ を加えた範囲以内
 2. 4.(2)で定めた鉄筋には、フックをつける。
 3. 印は、継手及び余長を示す。
 4. 破線は、柱内定着の場合を示す。
 * L a の数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

C. ハンチのある場合の定着及び余長

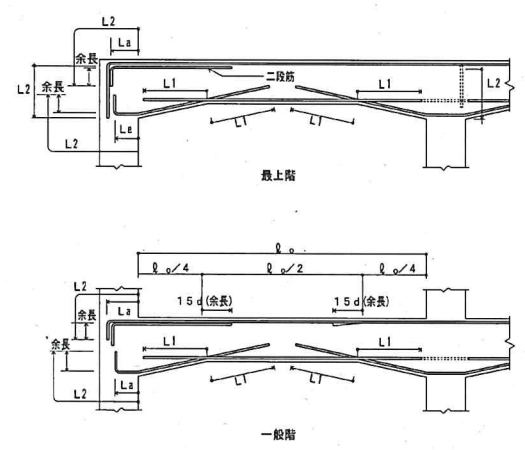


図 9.3

(注) 1. 4.(2)で定めた鉄筋には、フックをつける。
 2. 印は、継手及び余長を示す。
 3. 梁内定着の端部下端筋が接近するときは、印のように引き通すことができる。
 4. 破線は、柱内定着を示す。
 * L a の数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

図 9.4

10. 小梁及び片持梁

A. 小梁主筋の継手及び定着

(1) 連続小梁

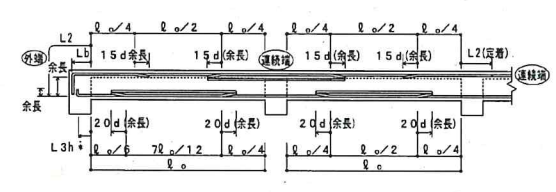


図 10.1

(2) 単独小梁

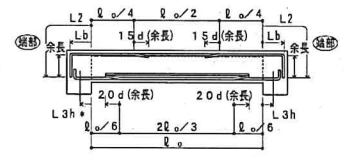


図 10.2

(注) 1. 印は、余長位置を示す。
 2. 図示のない事項は、9.及び12.による。
 3. 梁せいが小さく垂直で余長がとれない場合、斜めにしてもよい。
 4. L a を確保できない場合は、標示6.(c)によることができる。

B. 片持梁主筋の定着

(1) 先端に小梁のない場合

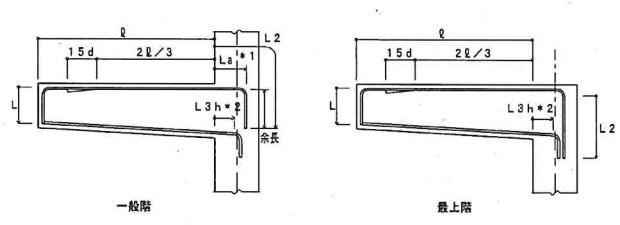
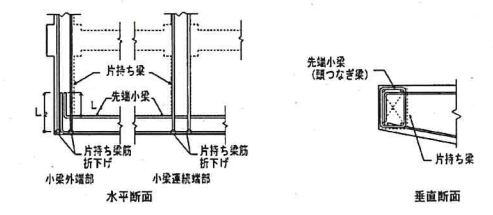


図 10.2

(注) 1. 図示のない事項は 9 による。
 2. 印は、余長位置を示す。
 3. 先端の折曲げ長さ L は、梁せいからかぶり厚さを除いた長さとする。
 * 1. L a の数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。
 * 2. L3h を確保できない場合は、標示6.(c)によることができる。

図 10.3

(2) 先端に小梁がある場合



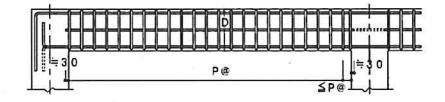
(注) 1. 図示のない事項は、(1)による。
 2. 先端小梁終端部の主筋は、片持梁内に水平定着する。
 3. 先端小梁の連続端は、片持梁の先端を貫通する通し筋としてよい。

図 10.4

11. あばら筋

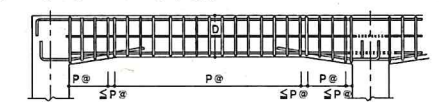
A. あばら筋の割付け

1. 間隔が一律で、ハンチのない場合



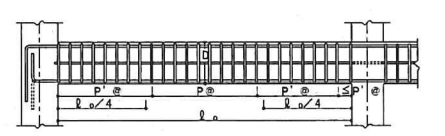
(注) 1. あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
 2. 図中の P @ は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

2. 間隔が一律で、ハンチのある場合



(注) 1. あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
 2. 図中の P @ は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

3. 梁の端部で間隔の異なる場合



(注) 1. あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
 2. 図中の P @、P\' @ は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図 11.1

B. あばら筋、腹筋及び幅止め筋の一般事項
 1. あばら筋の種類、径及び間隔は、特記による。
 2. 幅止め筋及び受け幅止め筋は、D10-1,000@程度とする。
 3. 腹筋に継手を設ける場合の継手長さは、150mm程度とする。
 4. あばら筋組立ての形及びフックの位置

(1) 形は図11.2(イ)形を標準とする。ただし、L形梁の場合は、(ロ)又は(ハ)、T形梁の場合は、(ロ)～(ニ)とすることができる。

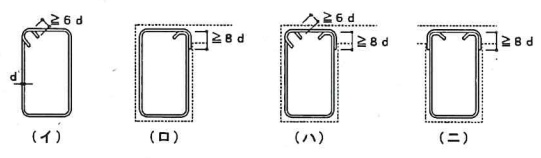


図11.2

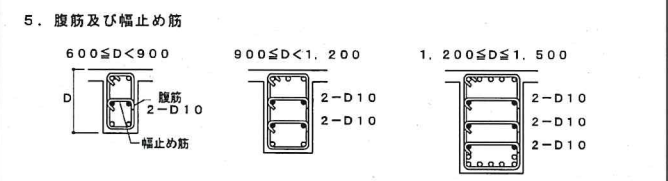


図11.3

12. 基礎梁

A. 一般事項
 (1) 梁筋は、原則として柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、柱内に定着する。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図12.1による。
 (2) 梁筋を柱内に定着する場合は、9.A.(2)による。

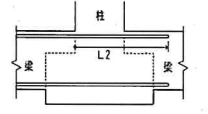


図12.1

B. 独立基礎で基礎梁にスラブが付かない場合の主筋の継手、定着及び余長

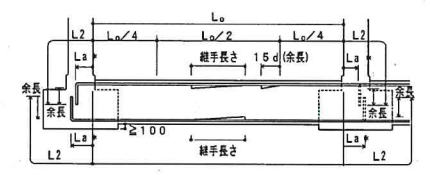


図12.2

(注) 1. 図示のない事項は9.による。
 2. 印は、継手及び余長を示す。
 3. 破線は、柱内定着の場合を示す。
 4. Laの数值は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

C. 独立基礎で基礎梁にスラブが付く場合の主筋の継手、定着及び余長 (耐圧スラブが付く場合はD.による)

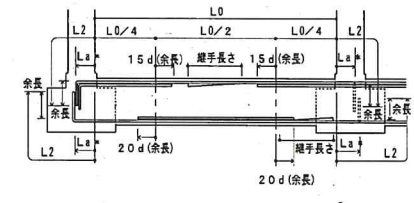


図12.3

(注) 1. 図示のない事項は9.による。
 2. 印は、継手及び余長を示す。
 3. 破線は、柱内定着の場合を示す。
 4. Laの数值は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

D. 連続基礎及びべた基礎の場合の主筋の継手、定着及び余長

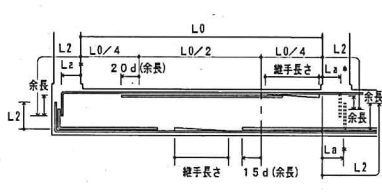


図12.4

(注) 1. 図示のない事項は9.による。
 2. 印は、継手及び余長を示す。
 3. 破線は、柱内定着の場合を示す。
 4. Laの数值は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

E. 基礎接合部の補強

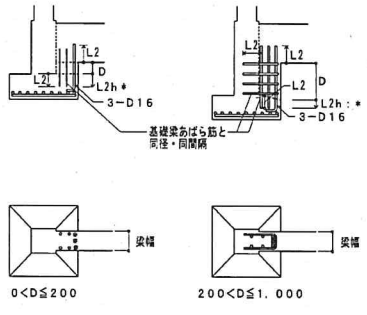


図12.5

(注) 1. L2hを確保できない場合は、6.(c)によることができる。

13. 基礎

A. 杭基礎の場合
 既製コンクリート杭の杭頭補強の方法は、図13.1のA形又はB形とし、適用は特記による。特記がなければB形とする。
 なお、中詰めコンクリートは、基礎のコンクリートと同じ調合のコンクリートを使用する。
 既製コンクリート杭以外の場合は、特記による。

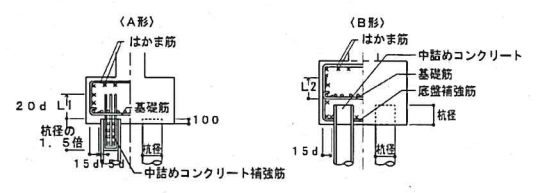


図13.1

(注) 1. 中詰めコンクリート補強筋は、次による。
 ・杭径300φ以下 4-D13
 ・杭径350-400φ 6-D13
 ・杭径450-600φ 8-D13
 ・帯筋 D10-100@
 2. 中詰めコンクリート補強筋は、フックをつけない。

B. 直接基礎(独立基礎)の場合の配筋は、図13.2による。

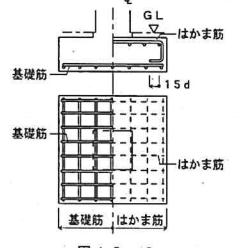


図13.2

C. 直接基礎(連続基礎)の場合の配筋は、図13.3による。

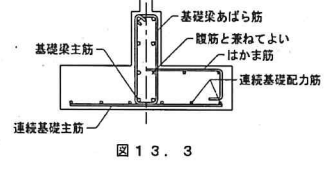


図13.3

14. スラブ

A. 一般事項
 1. 配筋は、中央から割付け、端部は定められた間隔以下とする。
 2. 鉄筋の重ね継手長さは、L1とする。
 B. 定着長さ及び受け筋
 定着長さ及び受け筋は、図14.1による。ただし、引き通すことができない場合は、図14.2により梁内に定着する。

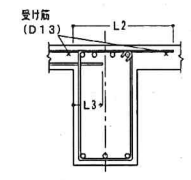


図14.1

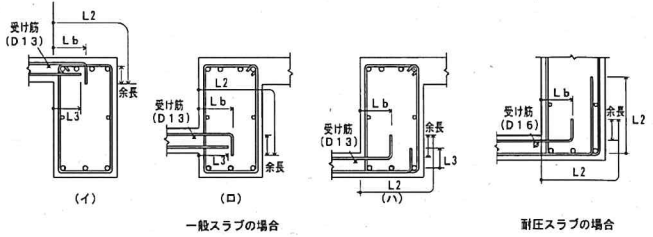


図14.2

(注) 1. Lbを確保できない場合は、6.(c)によることができる。

15. 壁

A. 一般事項
 1. 壁配筋の重ね継手はL1、定着の長さはL2とする。
 2. 重ね継手及び定着の長さが取れない場合は、監督職員と協議する。
 3. 幅止め筋は、縦横ともD10-1,000@程度とする。
 4. 原則として、柱及び梁内に壁筋の継手を設けてはならない。

B. 壁の基準配筋は下表により、種別は特記による。

種別	縦筋及び横筋	断面図(mm)
W12	D10-200@シングル	120
W15A	D10-150@シングル	150
W15B	D10-100@シングル	150
W18A	D10-200@ダブル	180
W18B	D10-150@ダブル	180
W20A	D10-200@ダブル	200
W20B	D10-150@ダブル	200

(注) 壁筋の配筋順序は、規定しない。

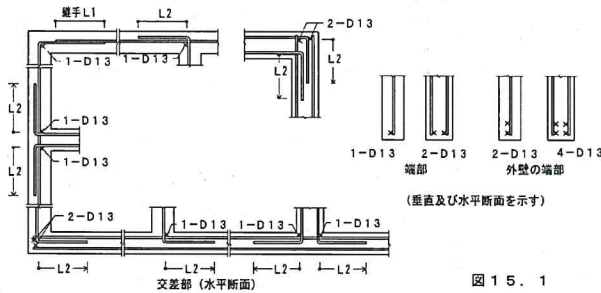
鉄筋コンクリート構造配筋基準図 6-5

C. 片持ちスラブ階段を受ける壁の配筋は、下表により、種別は特記による。

種別	断面図	縦筋及び横筋	階段の配筋種別
KW1		縦筋 D13-200@ダブル	KA1
		横筋 D10-200@ダブル	KA3
KW2		縦筋 D13-150@ダブル	KA2
		横筋 D10-200@ダブル	KA4

(注) 縦筋は、横筋の外側に配筋する。

D. 壁の交差部及び端部の配筋は、図15.1による。



B. 二辺固定スラブ形

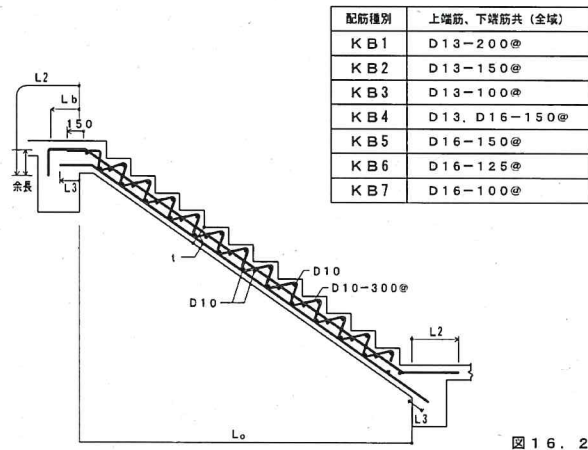


図16.2

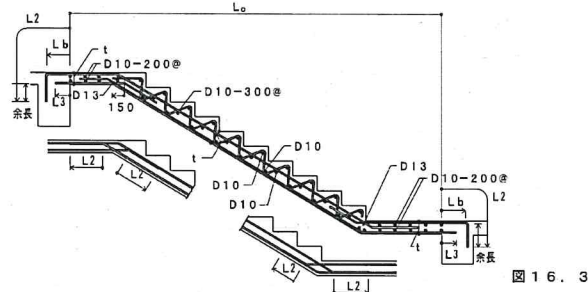


図16.3

(注) 1. L₁を確保できない場合は、6.(c)によることができる。

16. 階段

A. 片持ちスラブ形

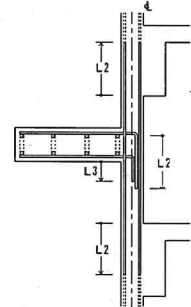


図16.1

(注) 1. 壁配筋は15.c.による。
2. 階段主筋は、壁の中心線を越えてから縦に下ろす。
3. スラブ配筋の継手及び定着の長さは、6のL₁とする。

配筋種別	KA ₁	KA ₂
配筋図		
配筋種別	KA ₃	KA ₄
配筋図		

17. 補強 特記による。特記のない場合は下記による。

A. 壁開口部の補強

(1) 壁開口部の補強は、表17.1のA形又は表17.2のB形とし、適用は、特記による。特記がなければB形とする。ただし、耐震壁の補強筋は特記による。

表17.1 A形

壁の種類	補強筋	
	縦・横	斜め
W12, W15	1-D13	1-D13
W18, W20	2-D13	2-D13

表17.2 B形

壁の種類	補強筋	
	縦・横	斜め
W12, W15	2-D13	1-D13
W18, W20	4-D13	2-D13

(2) 壁開口部補強の定着長さ

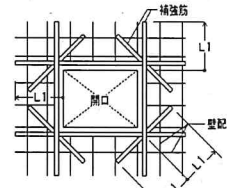


図17.1

(3) 開口部は柱及び梁に接する部分又は鉄筋を緩やかに曲げることにより開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。

B. スラブの開口部補強

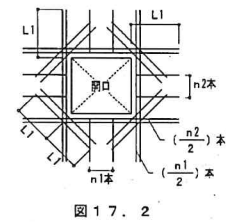


図17.2

スラブの開口部の補強は、特記による。特記がなければ次による。
(1) スラブ開口部によって切られる鉄筋と同量の鉄筋で周囲を補強し、隅角部に斜め方向に2-D13 (ℓ = 2L1) シングルを上下筋の内側に配筋する。
(2) スラブ開口の最大径が両方向の鉄筋間隔以下で、鉄筋を緩やかに曲げることにより、開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。

C. 屋根スラブの補強

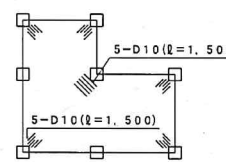


図17.3

屋根スラブの出隅及び入り隅部分には、図17.3により、補強筋を上端筋の下側に配置する。

D. 片持ちスラブの出隅部

1. 補強の配筋は、特記による。特記がなければ配筋方法は図17.4による。
2. 出隅受け部は(図17.4の斜線部分)の配筋は、特記による。

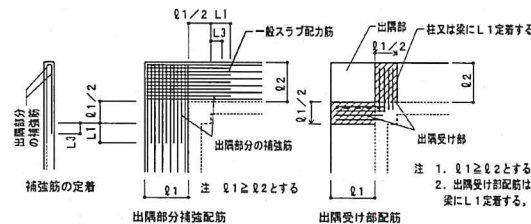
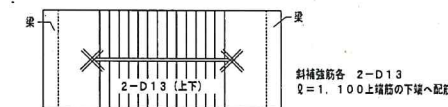


図17.4

E. 階段踊場補強筋



18. 雑配筋要領 特記による。特記のない場合は下記による。

A. 片持ちスラブ

(1) 片持ちスラブの基準配筋 (C形基準配筋) は下表及び図18.1による。配筋種別及びスラブ厚さは、特記による。

配筋種別	主筋	配筋種別	主筋
CS2	上 D13-150@ 下 D13-300@	CS6	上 D10.13-200@ 下
CS3	上 D10.13-150@ 下 D10.13-300@	CS7	上 D10-200@ 下
CS4	上 D10.13-200@ 下 D10-200@		

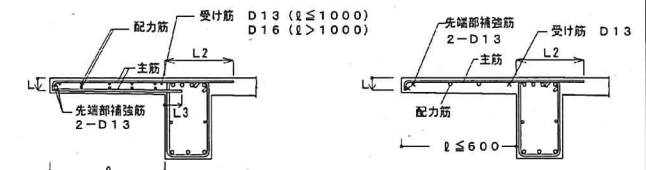


図18.1

(注) 1. 先端の折曲げ長さLは、スラブ厚よりかぶり厚を除いた長さとする。
2. スラブに段差のない場合は、主筋を引き通してスラブに定着してもよい。

(2) 先端に壁が付く場合の配筋は、図18.2による。

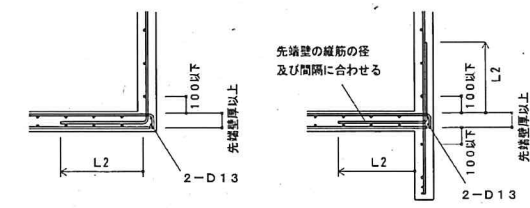


図18.2

B. 段差のあるスラブの補強

150mm以下の段差のあるスラブの補強は、図18.3による。

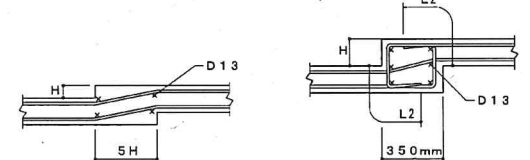


図18.3

C. 折れ曲がりスラブ

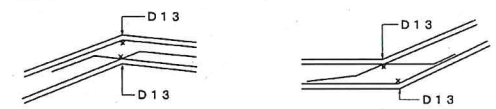


図18.4

D. パラベットの配筋は、下表による。

コンクリート厚さ	方向	配筋	先端補強筋
特記による	縦	特記による。	
	横	特記による。	

E. 土間スラブの打継ぎ補強

基礎梁とスラブを一体打ちとしないで、打継ぎを設ける場合の補強を示す。(特記がなければ、図18.5による。)

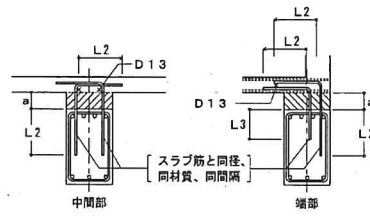


図18.5

F. 土間コンクリートの補強

土間コンクリートの補強筋は、特記による。なお、基礎梁との接合部は、図18.6による。

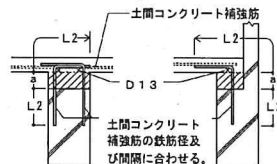


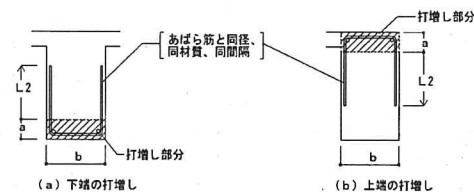
図18.6

(1) 土間コンクリートとは、土に接するスラブのうち、床荷重を直接支持地盤へ伝達できるものをいい、それ以外は、土間スラブとして、梁及び柱を介して基礎を伝達するものとする。

(2) aは300mm以下の場合に限る。

G. 梁打増し補強

梁の打増しは、図18.6により、打増し幅が70mm以上の場合に適用する。



(a) 下増しの打増し (b) 上増しの打増し

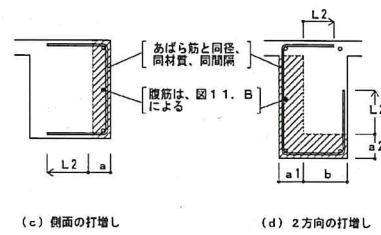


図18.7

H. 柱打増し補強

(a) 柱の打増しは、図18.8より、打増し幅が70mm以上の場合に適用する。軸補強筋は、特記による。

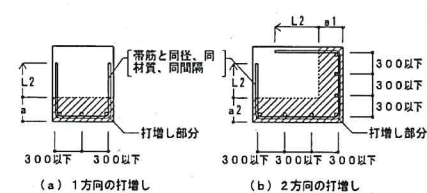


図18.8

I. 梁貫通孔の補強

1. 梁貫通孔補強筋の名称などは図18.9による。

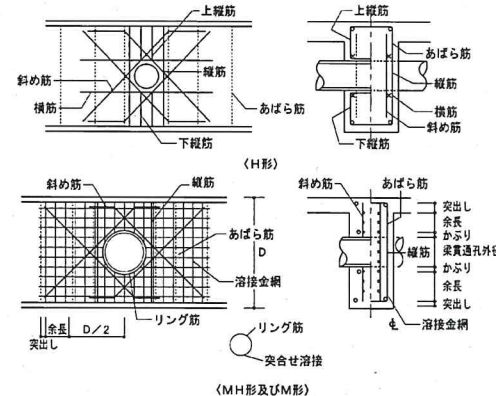
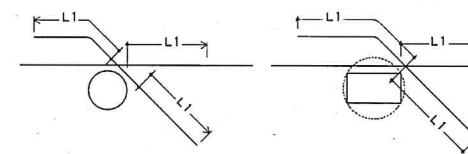


図18.9

- 孔の径は、梁せいの1/3以下とし、孔が円形でない場合はこれの外接管とする。
- 孔の上下方向の位置は、梁せい中心付近とし、梁中央部下端は、梁下端より1/3Dの範囲に設けてはならない。
- 孔の中心位置の限度は、柱及び直交する梁(小梁)の面から原則として1.5D(Dは梁せい)以上離す。ただし、基礎梁、壁付帯梁は除く。
- 孔が並列する場合の中心間隔は、孔の径の平均値の3倍以上とする。
- 縦筋及び上下縦筋は、あばら筋の形に配筋する。
- 補強筋は、主筋の内側とする。また、鉄筋の定着長さは図18.10による。
- 孔の径が梁せいの1/10以下、かつ、150mm未満のものは、鉄筋を緩やかに曲げることにより、開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。
- 溶接金網の余長は1格子以上とし、突出しは10mm以上とする。
- 溶接金網の貫通孔部分には、鉄筋1-3φのリング筋を取り付ける。なお、リング筋は、溶接金網に4箇所以上溶接する。
- 溶接金網の割付け始点は、横筋ではあばら筋の下側とし、縦筋では貫通孔の中心とする。



貫通孔が円形の場合 貫通孔が四角形の場合

図18.10

(1) H形配筋

配筋種別	斜め筋	縦筋	横筋	上下縦筋	配筋図
H1	なし	なし	なし	なし	
H2	2-2-D13	なし	なし	なし	
H3	4-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	
H4	4-2-D16	2-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	
H5	4-2-D16	なし	なし	なし	
H6	4-2-D19	4-2-D13	2-2-D13	3-2-D13	
H7	4-2-D22	なし	なし	なし	

(注).....は、一般部分のあばら筋を示す。

(2) M形配筋

配筋種別	縦筋	溶接金物	リング筋	配筋図
M1	2-2-D13	なし	なし	
M2	4-2-D13	なし	なし	
M3	4-2-D13	2-6φ-100φ	13φ	
M4	6-2-D13	なし	なし	

(注).....は、一般部分のあばら筋を示す。

(3) MH形配筋

配筋種別	斜め筋	縦筋	溶接金物	配筋図
MH1	なし	なし	なし	
MH2	2-2-D13	2-2-D13	なし	
MH3	2-2-D13	なし	なし	
MH4	4-2-D13	2-2-D13	2-6φ-100φ	
MH5	4-2-D16	なし	なし	
MH6	4-2-D16	4-2-D13	2-6φ-100φ	
MH7	4-2-D19	なし	なし	

(注).....は、一般部分のあばら筋を示す。

(注) 採用する配筋については、特記による。

大臣認定による既製品を使用する場合は、適用条件は、すべて認定内容による。

J. コンクリートブロック積壁との取合い

(a) 控壁の配筋

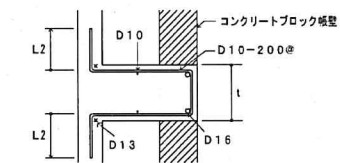


図18.11

(b) 帳壁が土間コンクリート上に設置される場合の補強

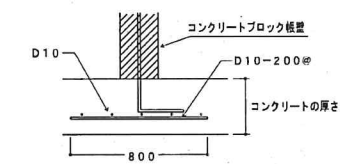
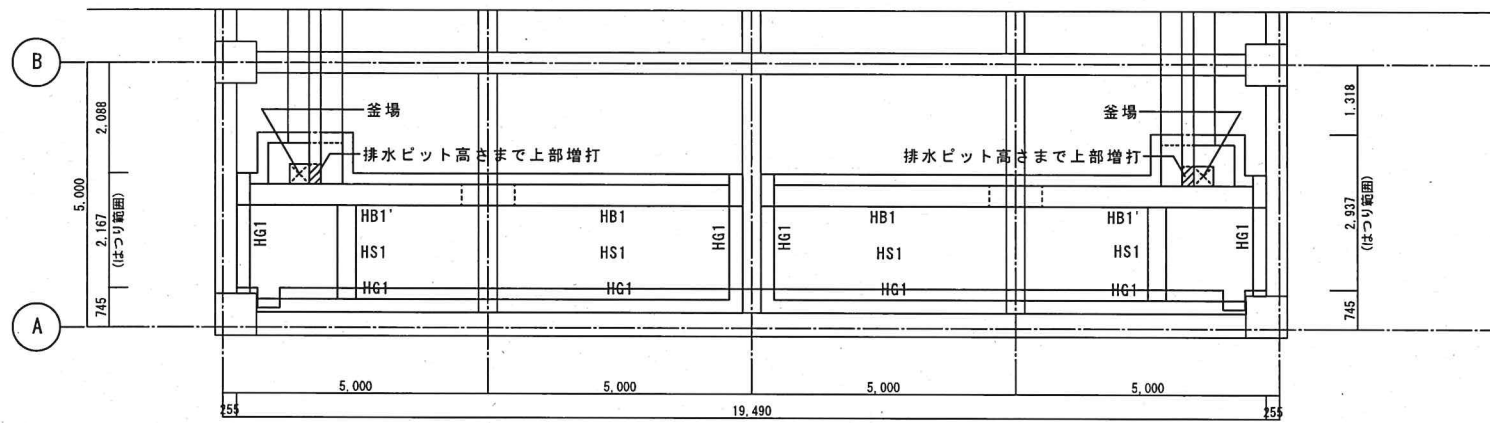
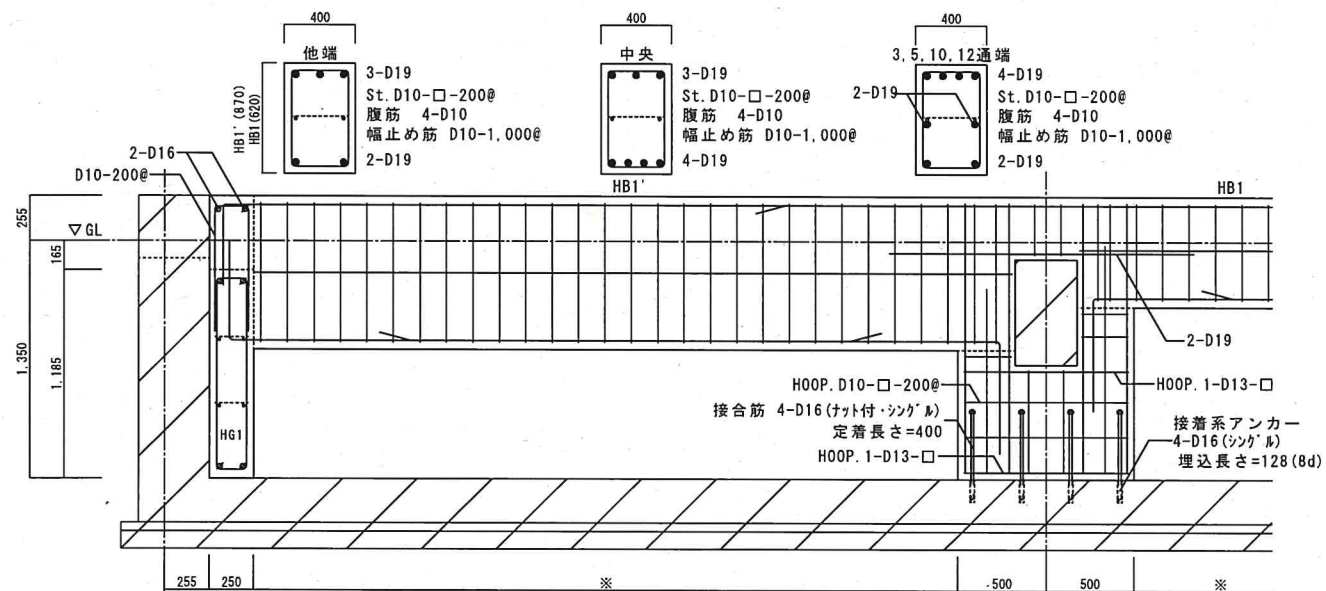


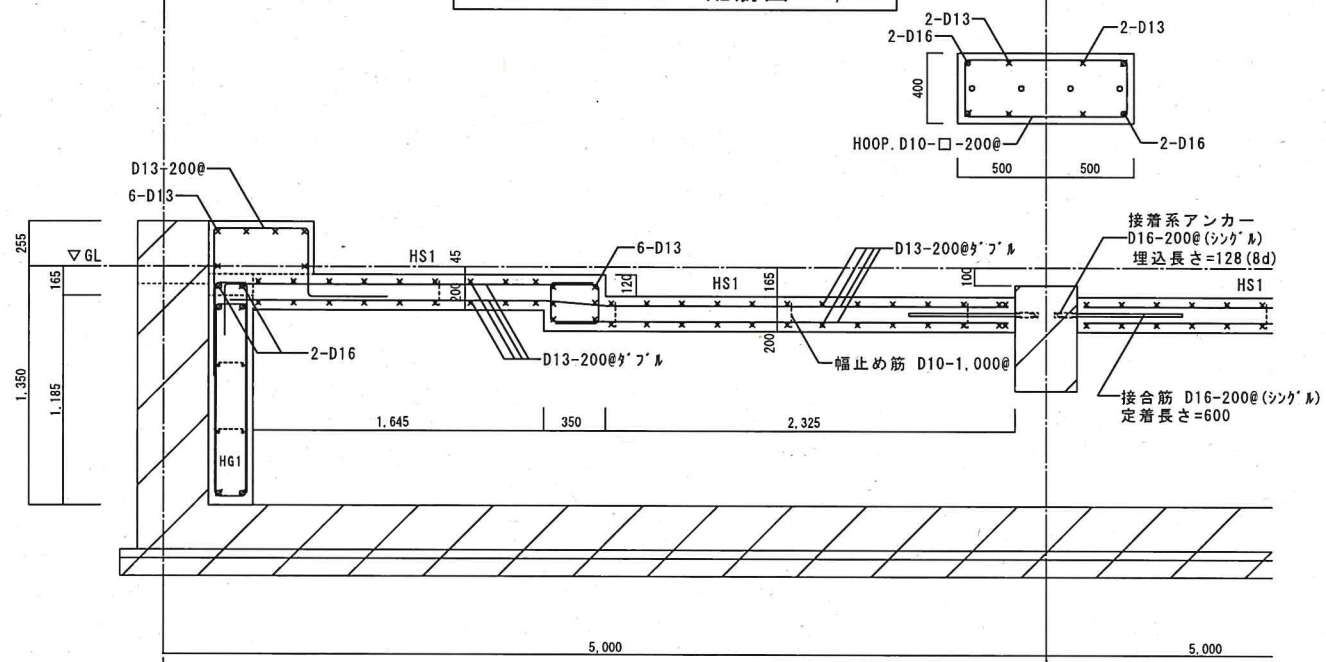
図18.12



1階床伏図 1/100

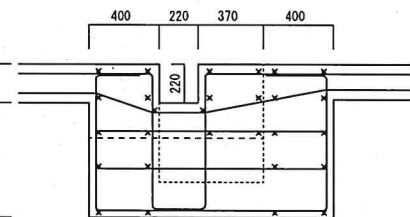
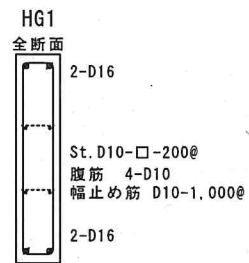


HB1・HB1' 配筋図 1/30

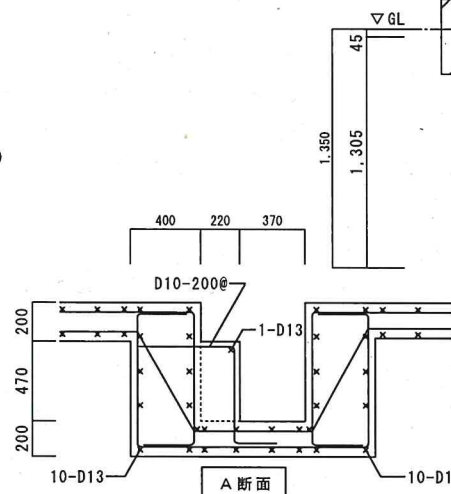


HS1 配筋図 1/30

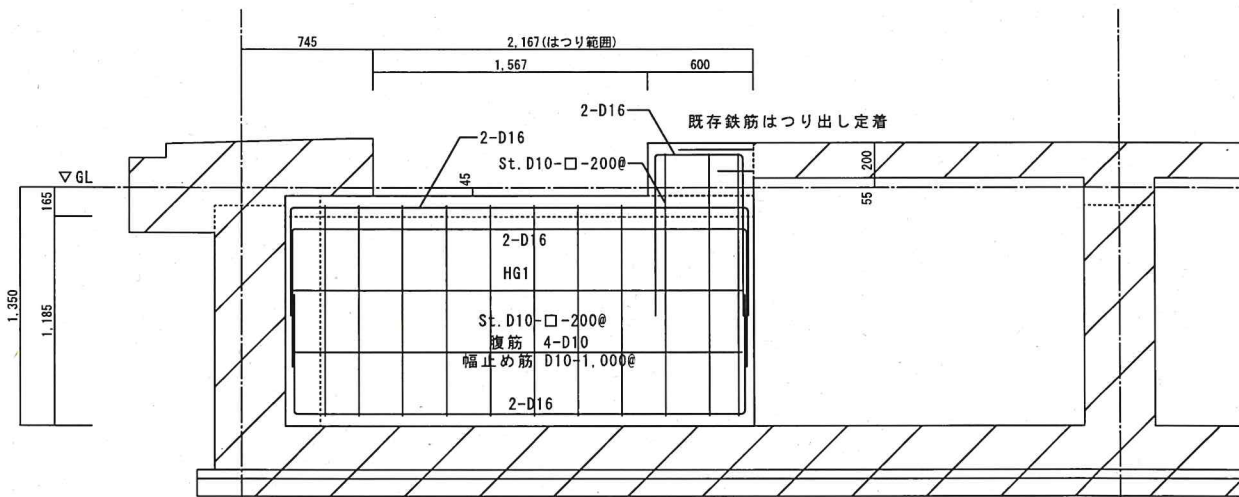
10, 12



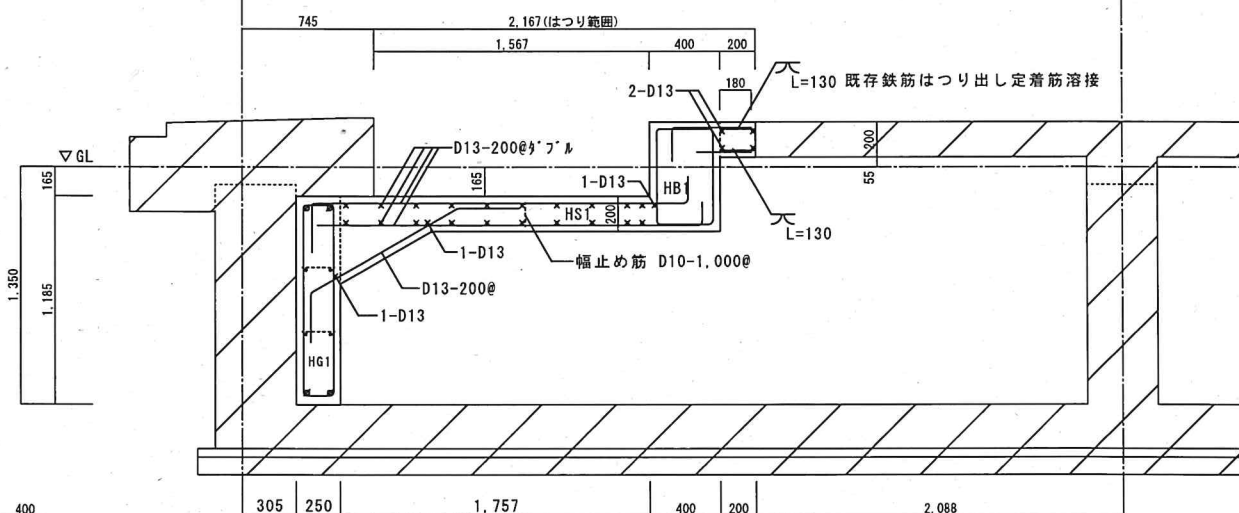
B断面



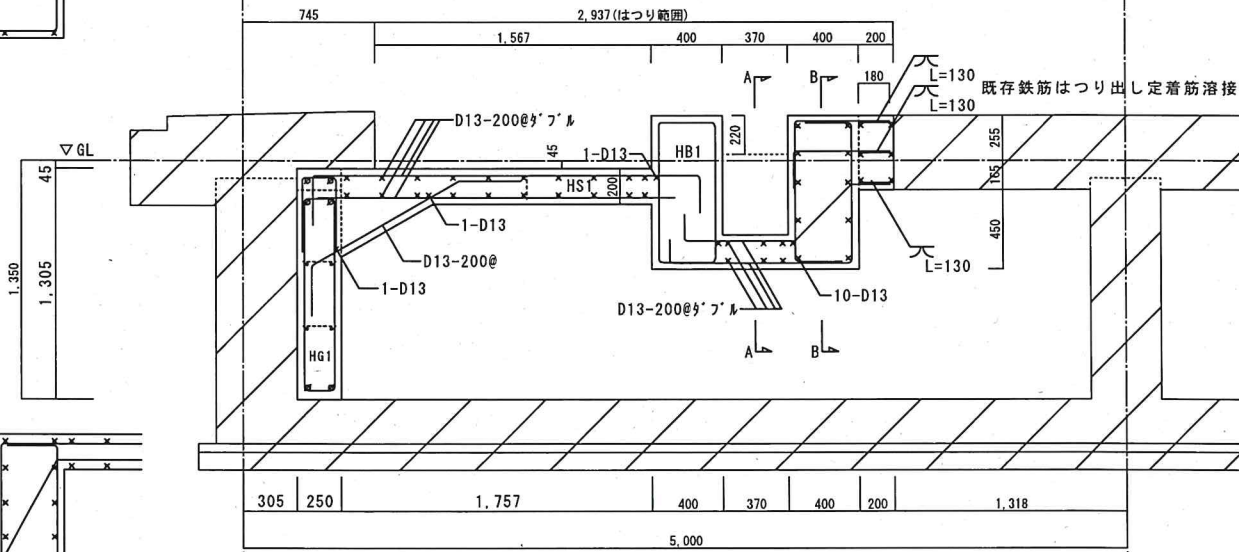
A断面



HG1 配筋図 1/30



一般部配筋図 1/30



釜場部配筋図 1/30

※幅止め筋 D10-1,000@

●工事名	R1 営繕 消防防災航空隊事務所 松・豊久 防災機能強化止水板設置他工事	●図面番号	S-007	有限会社 佐藤建築企画設計 徳島市幸町1丁目43番地 TEL (088) 625-1759
●図面名	防水板部配筋図 1	●縮尺	1:100,30	管理建築士 佐藤 幸好 1級建築士 大臣登録137218号